
La v?rit?

イルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L a v ? r i t ?

【Nコード】

N 7 3 4 9 J

【作者名】

イルド

【あらすじ】

少年が幼き日の出来事から騎士に憧れ
騎士を目指すファンタジー

になる予定

ドラゴン、竜、ナーガ、魔法、魔術、妖術

巨人、小人、妖精、エルフ、魚人、人魚

魔女、魔法使い

東洋、西洋、世界中に似たような生物などの言い伝えがあるのはなぜなのか？

伝説、神話

紐解いてみようそれらの真実をL a v ? r i t ?

W I K I から引用

ノアの方舟に代表される洪水神話など、多くの文化集団が類似する神話を持っている

この作品は完璧なフィクションです。

よんでもおもしろくありません

完璧な作者の妄想で構成されています

プロローグ

その日僕たちはこっそり町を抜け出して森にある古びた屋敷に遊びに行った。

魔物がでるといふ噂もあったが僕たちの冒険心を止めることはできない。

「ここ昔はえらい貴族の屋敷だったんだろ？ 宝物とかあるかも！」

「きつとあるよ！ 探してみよう」

屋敷の中に入ってみると玄関広間の上には埃にまみれているがシャンドリアが飾られておりかつての栄華を感じさせている。

「すげーきつとこれなら宝物だってあるよ」

うきうきわくわくしながら僕たちはいつのまにか屋敷の奥まで入り込んでいた。

「ねえ、アルあそこの部屋明かりがついてるよ？ だれかいるのかな？」

屋敷の廊下の置くから1つだけ光を放っている部屋があった。

冷静に考えてみれば廃墟の屋敷に普通ヒトはいない。

「覗いてみようか」

音をたてないように慎重に部屋に近づくと静かに扉をあけた。

部屋の中は、古びた鎧を着たヒトが歩き回っていた。

ピシッ！

足元にある割れたガラスを踏んで音をたててしまった。

ガシャンガシャン

鎧のこすれる音が聞こえる。

気がついそのヒトはゆつくりと近づいてきた。

「ごめんなさい。僕たち人がいるなんてしらなくてこんなつもりじゃ・・・」

おもわず下をむいてうつむいてしまう。

自分の家に無断で入られて怒らない人など少ないだろう。

ヒュンッ

突然、風をきるような音がきこえた。

ゆつくりと顔をあげ上を見上げるとその鎧のヒトには首がなかった。

そして、隣にいた友達は首から赤い雫を流しポトリとおちた。

「ウワァァ!!」

僕は逃げ出した。

息の続く限り走って走ってやっとの玄関広間にでたところで鎧にぶつかった。

ガシャンッ

もうだめだ……

下を向きうずくまってしまった。

「子供っ!? なぜこんなところに子供がいる!？」

今度は人であり服装からすると騎士団のようだ。

「あ……あいつがくるっ」

程なくしてあいつがきた。

「あいつ? くっデュラハンか噂は本当だったか! 俺が時間を稼ぐ撤退するぞ!! こいつを頼んだ」

そして僕をほかの人にまかせると鎧にむかって走り出した。

銀色に輝く剣を掲げると勢いよく斬りかかった。

キンキンキンッ

金属のぶつかる音があたりに響き渡る。

風の流れるような剣技でアイツとうちあっている。

す・・・・・・・・すごい

「隊長伏せてください！」

「・・・・・・・・風の精霊よ わが願いに答え示したまえ！ エア・ブラスト！！！」

数人の騎士たちが手をかざすとあたりの埃などを巻き上げながら、突風が鎧にむかって放たれた。

ガッシャーン

風のかたまりが命中すると鎧は勢いよく吹き飛ばされ、壁に激突した。

「よし！ いまだ！ 撤退するぞ！」

こうして僕は騎士団につれられて屋敷を後にした。

「お前、名は！？ なぜあんなところにいた！？」

廃墟から出るとぶつかった男の騎士が尋ねてきた。

「ア・・・・・・・・アルノルト、アルノルト・ヴィーラント友達と探検に来て・・・・・・・・それで・・・・・・・・アイツが友達を・・・・・・・・」

思い出すと自然と涙がこぼれ落ちた。

「あいつはデュラハンといってな並の人間じゃ勝てん生き残っただけでも幸運だ」

諭すように彼はいった。

「でもっ友達は」

「くやしいか？　ならば強くなれ大切なものを守れるくらい強く！」

引き上げるぞ、そういうと騎士達は戻る準備を始めた。

「僕もつれてってよ！」

あの流れるような剣技……この人といれば強くなる！

そう確信した。

「今は無理だ。」

「どうしてっ強くなれっていったのはあんただろ！」

命の恩人にむかって怒鳴り散らした。

「まだ君は若い、しばらくは町で生活して自分を知れ！」

そう簡単に人生を決めるものではない。

だが12を過ぎてまだ望むのであれば城に私を訪ねて来い

俺の名は・・・・・・・・」

1話

懐かしい夢をみていた。

騎士見習いとしてゲルハルト隊長に仕えて早5年。

月日がたつのは早いものだ。

あたりはまだ薄暗いが、アルノルトはすばやく着替えると早朝の鍛錬をするために訓練場へと足を急がせた。

訓練場につき辺りを見回すとまだ、まばらではあるがすでに鍛錬をはじめている仲間たちがいる。

俺もがんばらなくては……………

「アルノルトおはよう」

振り返ると同期の見習いカールが顔に笑顔を浮かべながら歩いてきた。

「相手になるやつがいなくて困ってたんだよ。」

カールと俺は見習いの中では双璧をなし剣技で並ぶものはいない！

あくまで「見習い」のなかではあるが

「寝起きの軽い運動にもならないんだよ！」

素早く木剣を腰から引き抜くとカールの首筋に走らせた。

ガシッ

当然のようにカールは木剣を受け止めると長身がひるがえって、そのまま胴体に斬撃をあたえる。

アルノルトもそれを先読みしたかのように横つとびに交わすとすれ違いぎわに斬撃を放つ。

両者の木剣がうなりをあげ弧を描く。まるで踊っているようだ。

いつしか回りに人だかりができ、彼らは驚愕の表情を浮かべたまま、2人に見入っている。

「これで終わりだ!!」

両者が同時に言い放つと2人は激突した。

2つの木刀が宙を舞い空高く飛んでいった。

ゴツッ ウギヤア……………

鈍い音お供に悲鳴があがった。

見物人に飛んでいった木剣が当たったらしいが聞かなかったことにしよう。

「また引き分けか」

鼻血を噴いて倒れている見物人には見向きもしないでカールがいった。

もちろん俺にもそんな人物は見えない。

「そういえば、俺今日から魔法教えてもらうことになったんだぜ！」

そういいながら自慢げに胸をはった。

「自分だけ特別な存在だとおもうなよ！」

やっぱりおまえもかあそういいながら2人して空をあおいだ。

見習いになってから5年間こいつとつきあってきたが乗馬、剣術、槍術など戦いのための技術から

客の接待、食事の給仕、主人のお供までかぶらなかった事がない。

「カール！ アルノルト！」

突然叫びながら歩いてきたのはわれらが敬愛すべき隊長ゲルハルト殿

どこか怒っているのは気のせいだろうか？

「また問題起こしやがって！ 救護室でお前たちにやられたときけんでいるやつがいたぞ！」

そういわれた瞬間鼻血をふいて戦場を去っていった友の顔が頭をよぎった。

今回ののは間違いなく不幸な事故だ！　いつもはともかく。

「彼は立派でした」

馬鹿野郎！！　そういうと頭上に星がおちた。

「「いってえ」」

一瞬何がおきたか分からなかったがどうやら隊長に殴られたらしい。

「ふん！！　まあいい　これから魔法について教える。

お前ら自分の知っている範囲で魔法がどんなものかいってみろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349j/>

La v?rit?

2010年10月14日15時11分発行